

だ川、女郎の名など付たるを、めづらしくありがたがるは、やほのもて興する物なり、西鶴置土産に、花山藤之助、松風琴之丞、雪山松之助といへる陰子の名あり、一代男、やらうもてあそびは、散かかる花のもとに、狼のねて居るが如し、けいせいになじむは、入かゝる月の前に、ちやうちんのない心ぞかしとなむ、いづくへも招く處に行たるものなり、江戸には法度ありしかど止ざりければ、また寶永六年丑七月、狂言芝居野郎、并狂言に不出前髪有之者、外へ堅くつかはす間敷旨、前々より令停止候處、頃日右の族、方々へ參、藝致候由相聞不届候、向後木挽町さかひ町野郎子供不申及、役者共、又は白人にて藝いたし候者、一切外へ參間敷候云々、○中頓作江戸雀、師宣が畫入、元祿難波町邊に、ことのほかはやりけるかげま有けりと書り、是は堀江六軒町、今いふにはあるべからず、住吉町、高砂町、或は難波町裏河岸の内なるべし、

〔塵塚談上カゲマシヤ〕男色樓、芳町を第一として、木挽町、湯島天神、糞町天神、塗師町代地、神田花房町、芝神明前、此七ヶ所、二三十年已前まで樓ありけり、近歳は四ヶ所絶て、芳町、湯島神明前のみ残り、三四年已前は、芳町に百人餘も有りけるよし、此内より芝居へ出て歌舞するを舞臺子といひ、又色子とも稱して、四五十人もあり、此色子ども、末々は皆役者になれり、女形は多分此者どもより出来て、上手といふ地位にいたりしも、多く有けるよしなり、古評判記を見て知るべし、既に當時の尾上松縁は、舞臺子にて有しなり、近歳舞臺子絶てなし、然る故に江戸に女形の種なし、江戸役者の女形は有やなしやにして、女形は皆上方役者のみになれり、此節街カゲ艶郎、芳町に十四五人、湯島にも十人計も有よしを聞き、寶曆の比と違ひ、減少せし事にて、男色衰へたると見へたり、〔寛文見聞記〕芳町にかげまやとて、男色を賣る野郎屋あり、役者の弟子奉公人請狀にて抱へるよし、子供屋おほく有て、揚屋は料理茶屋にて別家なり、價一ト切百疋、晝三分夜二分也、野郎十八九より藝者にすといふ、又芝居にて女形の役者は平日人數少く、御殿場の狂言或は御姫様の行列